

畑ヶ坂遺跡1

畑ヶ坂遺跡 1

— 第4次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第170集



大野城市文化財調査報告書 第170集

大野城市教育委員会

2019

大野城市教育委員会

畑ヶ坂遺跡 1

— 第4次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第170集

2019

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長い形をしていますが、北部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

畑ヶ坂遺跡は、市域の南部に位置し、国指定史跡の牛頸須恵器窯跡のほぼ中央にあって、窯跡群が集中する牛頸川と平野川が下ってきて合流する場所に所在します。

この遺跡では、これまで3回の発掘調査を実施してきましたが、古墳時代後期から奈良時代にかけて営まれた集落の跡ということが分かってきました。この畑ヶ坂遺跡に隣接する塚原遺跡群や日ノ浦遺跡群と合わせると大きな村があったことが分かっていて、その時期は周辺の須恵器窯が造営された時期と同一で、その関連性が注目されるところです。

本書は、畑ヶ坂遺跡のほぼ中央に当たる場所で実施した第4次調査の成果を述べた報告ですが、遺跡名は違いこそすれ、塚原遺跡群や日ノ浦遺跡群の内容と同様の住居跡群が見つかり、両遺跡で見つかった集落の、西方への広がりを示す貴重な成果を上げることができたと思われまます。

本書が広く周知され、考古学の深化や文化財の保護等に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本調査にご理解ご協力いただいた土地所有者をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成31年3月29日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市畑ヶ坂1丁目64番で計画される宅地造成に伴う事前の発掘調査として実施した畑ヶ坂遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が調査主体となり、工事主体者である森山ゆうこ・森山秀幸氏の委託を受け実施した。
3. 本書に使用する実測図は遺構を澤田康夫・柴田 剛・山元瞭平が、遺物を三浦 萌・小嶋のり子が作成し、製図は三浦が行った。
4. 本書で使用する写真は現場の遺構写真を澤田が、全景写真を（有）空中写真企画に委託した。遺物写真は写測エンジニアリング(株)に委託し、牛嶋 茂が撮影したものを使用した。
5. 本書の遺構平面図中の方位は、座標北を表し、座標は国土座標系（第Ⅱ系）を使用している。
6. 本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。
7. 本書の執筆・編集は澤田が行った。
8. 本書掲載の遺物・写真は大野城市教育委員会で保管している。

本文目次

I. はじめに	1
II. 立地と環境	3
III. 調査の内容	5
IV. まとめ	22

図版目次

図版 1	調査地遠景、I区調査区全景
図版 2	II区調査区全景、SC01・02
図版 3	SC03完掘後、SC04完掘後
図版 4	SC03カマド細部、SK01土器出土状態、SK18
図版 5	出土遺物 1
図版 6	出土遺物 2

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	遺構配置図	5
第4図	SC01実測図	6
第5図	SC02実測図	6
第6図	SC01・02・04出土土器実測図	7
第7図	SC03実測図	8
第8図	SC03出土土器実測図	9
第9図	SC04実測図	11
第10図	不明土製品実測図	12
第11図	土坑実測図	14
第12図	土坑出土土器実測図	16
第13図	包含層出土土器実測図	20
第14図	その他の出土遺物実測図	21

I. はじめに

1. 調査の経過

畑ヶ坂遺跡は市域の南部、大野城市畑ヶ坂1丁目を中心に広がる古墳時代から奈良時代にかけての集落遺跡で、牛頸須恵器窯跡群の操業時期と同時期の大規模な集落として注目を集めている遺跡である。遺跡地図の範囲内では、過去3回の発掘調査が実施されており、今回の調査は第4次の調査である。

調査地は畑ヶ坂1丁目64番地で、宅地造成に伴い、事前の協議が申し入れられた。当該地は宅地で、進入路や建物により、すでに旧地形が改変されていたが、試掘調査を実施したところ、遺構が確認されたので、この試掘調査の結果を受け、事業者と当該文化財の保護措置について協議を重ねた。

協議の結果、今回の工事では住宅の建築部分については保護層が確保されるものの、各宅地に付随する駐車場部分や進入路については、前面道路との擦り付けの関係で遺構面を削平する必要があり、駐車場予定箇所を主に遺構が破壊される影響範囲について発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は平成30年1月24日から調査区の設定等を行い、小雪の舞う中、重機による表土剥ぎを始めた。調査区が2箇所に分かれたので、北側をⅠ区、南側をⅡ区とし、掘削を進めた。Ⅰ区は包含層が予想以上に厚く、排土の置き場が狭かったため、表土剥ぎに手間取った。また、Ⅱ区については、調査範囲の約半分が大きく削平され、遺構も消滅していた。表土除去が進んだので、2月1日から作業員を投入し遺構検出を開始した。記録的な寒波の中ではあったが、大きな問題もなく作業を進めることができ、3月2日に全体の写真撮影にこぎつけた。その後、遺構の実測図を作成し、住居址の断ち割り作業、実測等を行った。3月8日に機材搬出をして現場での全ての作業を終了した。

2. 調査の組織

発掘調査及び本書発行の整理作業にかかる調査体制は以下のとおりである。

教育長	吉富 修
教育部長	平田 哲也
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	徳本 洋一、白壁 伸太 (29年度)、佐藤 智郁、林 潤也
主任技師	上田 龍児、龍 友紀 (29年度)
技師	山元 瞭平、藤井 恵美 (29年度)
主事	柴田 剛、坂井 貴志

嘱託 澤田 康夫、三浦 萌
(庶務) 呉羽 京子、鮫島 由佳 (29年度)
整理作業員 松岡 信子、町井 裕子、村山 律子、白井 典子、仲村 美幸
井上 理香、小嶋 のり子、松本友里江、津田りえ、吉田 薫



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

Ⅱ．立地と環境

1．遺跡の立地

大野城市の市域は南北に細長く、中央部がくびれる鼓形をしており、北部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。この牛頸山から派生する低丘陵群は牛頸川及びその支流である平野川、御笠川の支流の平田川などの小河川により開析が進み、八つ手状の複雑な地形をなしている。畑ヶ坂遺跡は平野川と牛頸川が合流する左岸側に広がる広範な微高地上の南西部分に立地する。

2．歴史的環境

大野城市市域の遺跡を振り返ってみると、旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、北部の乙金山山麓の釜蓋原遺跡では細石刃や縄文早期の押型文土器や石鏃が出土している他、松葉園遺跡、雉子ヶ尾遺跡、薬師の森遺跡、本遺跡周辺では出口遺跡、本堂遺跡など、散発的に認められる程度である。弥生時代になると、市域でも遺跡の数は増加するが、遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で甕棺墓等が営まれる。集落では、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡などがある。本遺跡の周辺でも本堂遺跡で小規模ながら集落が見つかるが、市域南部では遺跡の出現度は低い。古墳時代では、首長墓級の前方後円墳は認められないが、月隈丘陵にある御陵古墳群からは三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、古墳時代初期の有力者の存在を窺わせる。中期では30m級の円墳である笹原古墳があり、帆立貝式の成屋形古墳（太宰府市）とともに御笠川流域の盟主的な勢力の存在を示す。また、5世紀後半から6世紀前半ごろには初期の横穴式石室を持つ小円墳が群集する塚原古墳群が営まれるが、遺跡数としては少ない。6世紀後半になると乙金山、大城山の西山麓に群集墳が営まれる。持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群などがあり、本遺跡周辺では中通古墳群、後田古墳群、小田浦古墳群などがあるほか、梅頭窯跡では須恵器窯を転用した墳墓が見つかる。古墳時代の集落遺跡としては仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡等が弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡等が新たに出現する。古墳時代中期になると遺跡は減少し、石勺遺跡、村下遺跡に住居址が認められるが、その様相は判然としない。後期になると、仲島遺跡、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開する。南部の牛頸山山麓には6世紀中頃を始まりとする牛頸須恵器窯跡群が隆盛に向かい、一大窯跡群を形成する。牛頸塚原遺跡群、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、惣利西遺跡（春日市）などは、この牛頸窯跡群を造営した須恵器工人に関わる集落とされ、窯跡群がその流域に集中する牛頸川、平野川が合流するところには、日ノ浦遺跡、牛頸塚原遺跡という一連の大集落が営まれ、畑ヶ坂遺跡もこの集落の一角をなす。



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 水城 | 2. 谷川遺跡 | 3. 天神田窯跡 | 4. 唐土遺跡 | 5. 出口遺跡 | 6. 上園遺跡 |
| 7. 本堂遺跡群 | 8. 梅頭遺跡群 | 9. 野添遺跡群 | 10. 上大利小水城 | 11. 谷蟹窯跡 | 12. 大浦窯跡群 |
| 13. 平田窯跡群 | 14. 華無尾窯跡 | 15. 華無尾遺跡 | 16. 屏風田遺跡 | 17. 東浦窯跡群 | 18. 中通遺跡群 |
| 19. 上平田遺跡 | 20. ハセムシ窯跡群 | 21. 原窯跡 | 22. 井手窯跡群 | 23. 道ノ下窯跡群 | 24. 長者原窯跡群 |
| 25. 笹原窯跡群 | 26. 足洗川窯跡群 | 27. 城ノ山窯跡群 | 28. 日ノ浦遺跡群 | 29. 塚原遺跡群 | 30. 畑ヶ坂遺跡群 |
| 31. 胴ノ元古墳 | 32. 小田浦28地点 | 33. 後田遺跡群 | 34. 小田浦遺跡群 | 35. 大谷窯跡群 | 36. 石坂窯跡群 |
| 37. 月ノ浦1号窯跡 | 【春日市】 | 38. 惣利西遺跡 | 39. 惣利遺跡 | 40. 惣利東遺跡 | 41. 向谷古墳群 |
| 42. 平田北遺跡 | 43. 円入遺跡 | 44. 平田遺跡 | 45. 平田西遺跡 | 46. 平田東遺跡 | 47. 塚原古墳群 |
| 48. 浦ノ原窯跡群 | 【太宰府市】 | 49. 神ノ前窯跡 | 50. 篠振遺跡・窯跡 | 51. 尊田窯跡 | 52. 宮の本遺跡 |
| 53. 野口窯跡 | | | | | |

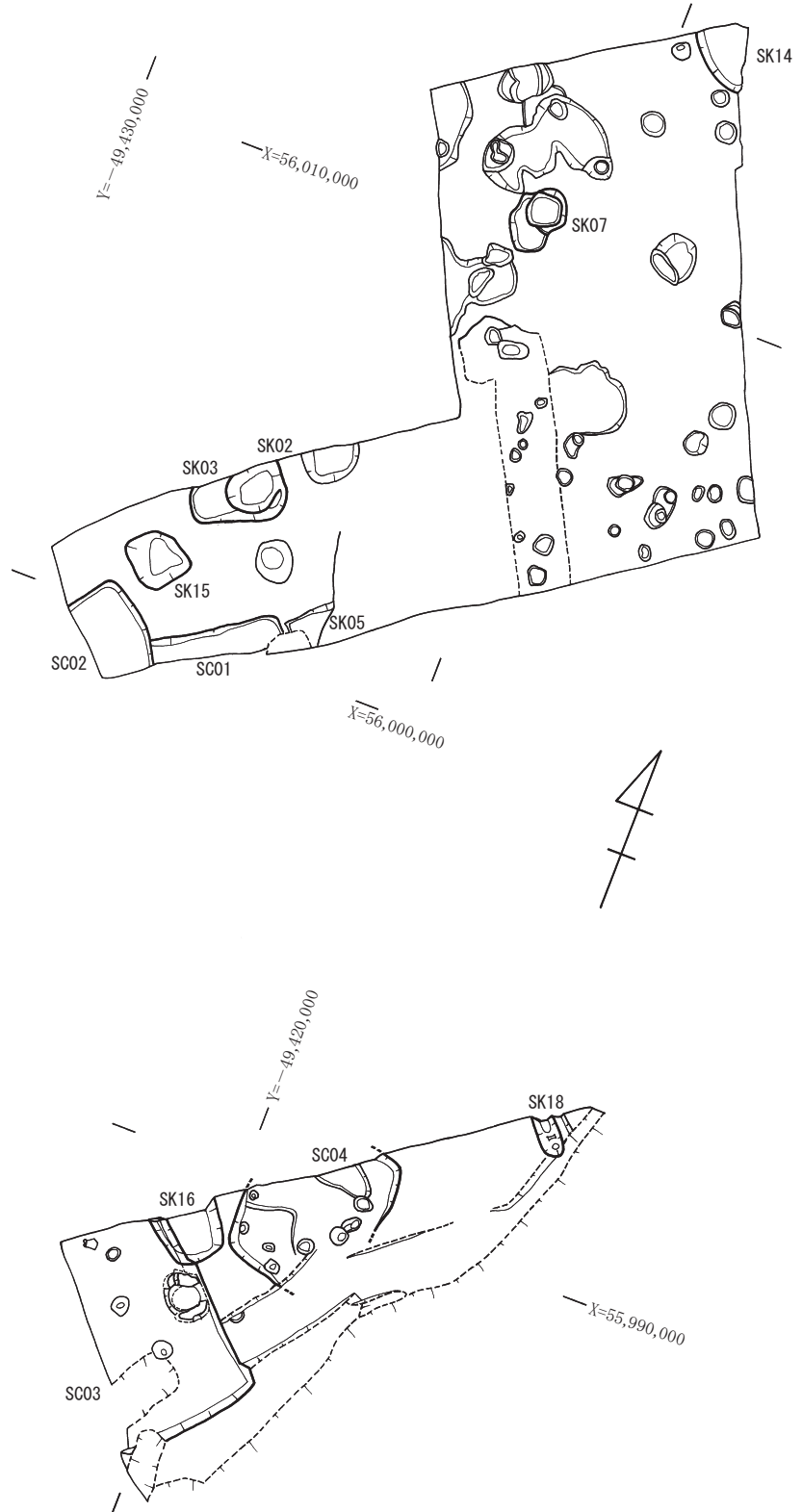
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要

調査地は、1983年から一帯で実施された大規模な区画整理事業により既に宅地化され、住宅が建設されていた。調査地の北側は丘陵が造成時に削られ、崖として残っており、東西に伸びる丘陵の南斜面が削平・改変されたことが分かる。

この一帯は牛頸川と平野川が合流することにより、広く開析され、広範な微高地が形成されて遺跡の好立地条件を作り出している。調査地は、宅地ではあるが、建物より、むしろ、植えられた巨木や、進入路により攪乱を受けていた。L字状に調査区を設定したI区では中央部で遺構ではない不規則な攪乱が認められ、土器の細片が散在し、木の根の残存状態から巨木の根による攪乱と考えられた。I区では真砂土の新期盛土の下から、遺構検出面



第3図 遺構配置図 (1/150)

までかなり厚く包含層が堆積し、炭化物や鉄滓、フイゴの羽口片、焼土塊などが含まれていた。後背の丘陵斜面には須恵器窯跡があったとされ、それらの崩壊土が堆積したと考えられるが、一方、鉄滓やフイゴ片の出土から小規模な鉄工房跡が削られ、包含層として堆積したことも考えられる。Ⅱ区では、この包含層は顕著ではなく、包含層は北西方向の斜面が、調査区の東南方向へ崩壊して堆積したものと考えられる。

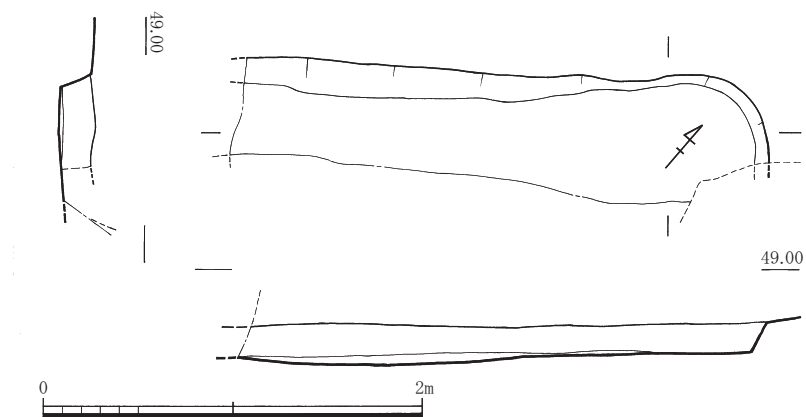
2. 検出遺構

今回の調査では調査面積の狭さや攪乱があった割には、比較的まとまった遺構が検出できた。検出遺構は、竪穴建物址4棟、土坑18基、ピット多数である。以下主な遺構について述べる。

(1) 竪穴建物跡

SC01 (図版2、第4図)

I区としたL形の調査区の西半で検出した。竪穴建物の北辺部で、北東隅部をかろうじて確認した。西側をSC02に切られ、東辺には新期の攪乱がある。ほとんどが調査区外に延びており、全容は知れないが、東西2.7m、深さ20cmを検出できた。



第4図 SC01 実測図 (1/40)

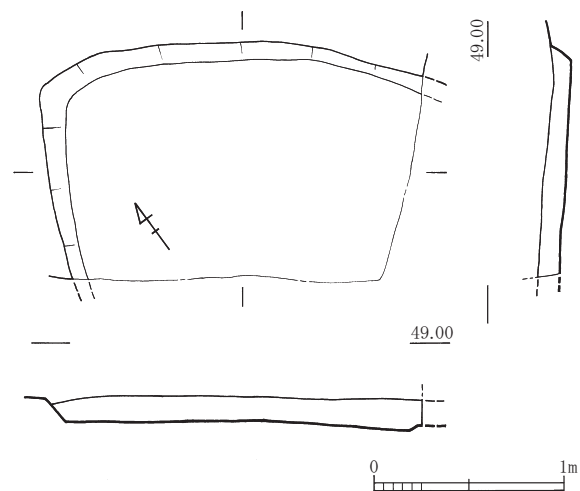
出土遺物 (図版5、第6図)

出土遺物は須恵器、土師器があるが、調査した範囲が狭く、また、細片が多かったため、図化できたのは2点だけである。

須恵器(1・2) 1は杯底部で、やや外向きの長方形の高台が付く。2はS字気味に湾曲した口縁部で器壁を薄く仕上げる。

SC02 (図版2、第5図)

I区西隅に検出したもので、竪穴建物の北隅部と思われる。南北2m、東西1mほどを確認したのみで、その全容は知れない。深さは15cmほどを残す。先のSC01を切っている。

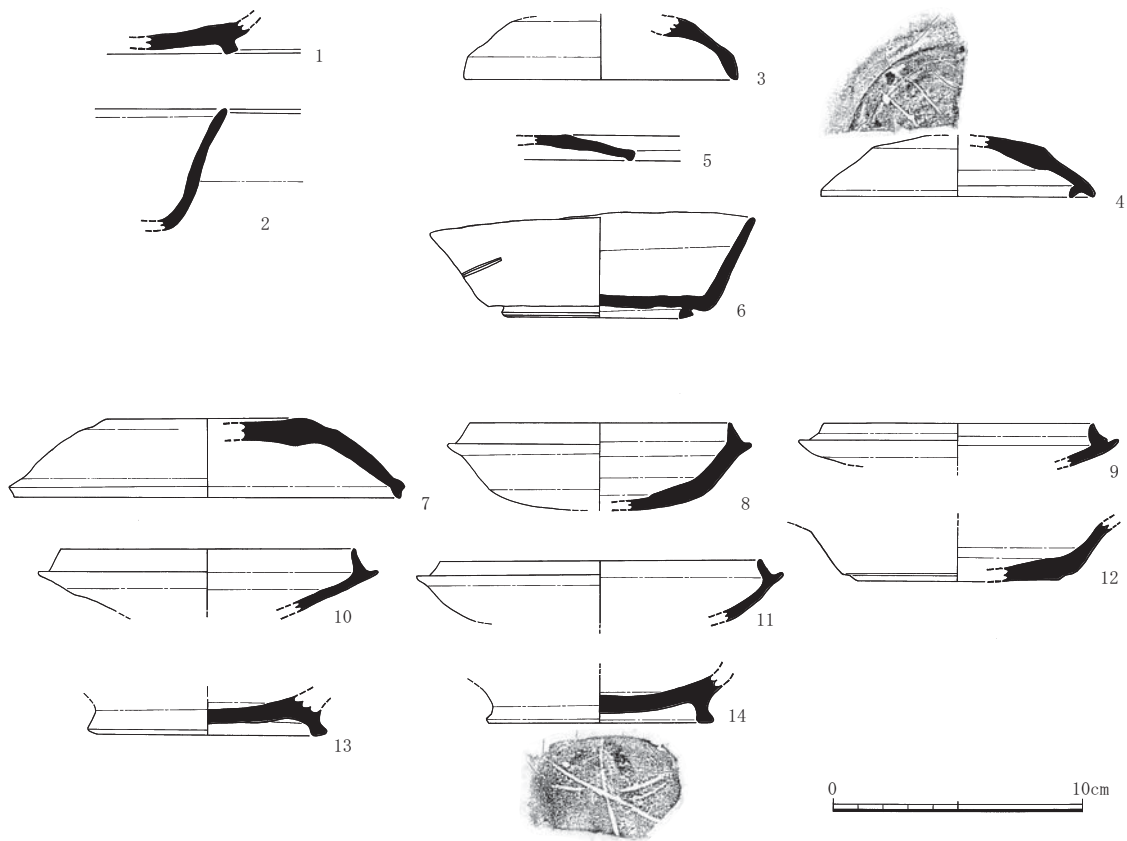


第5図 SC02 実測図 (1/40)

出土遺物 (図版5、第6図)

須恵器

杯蓋(3~5) 3は天井部が厚く、口縁部



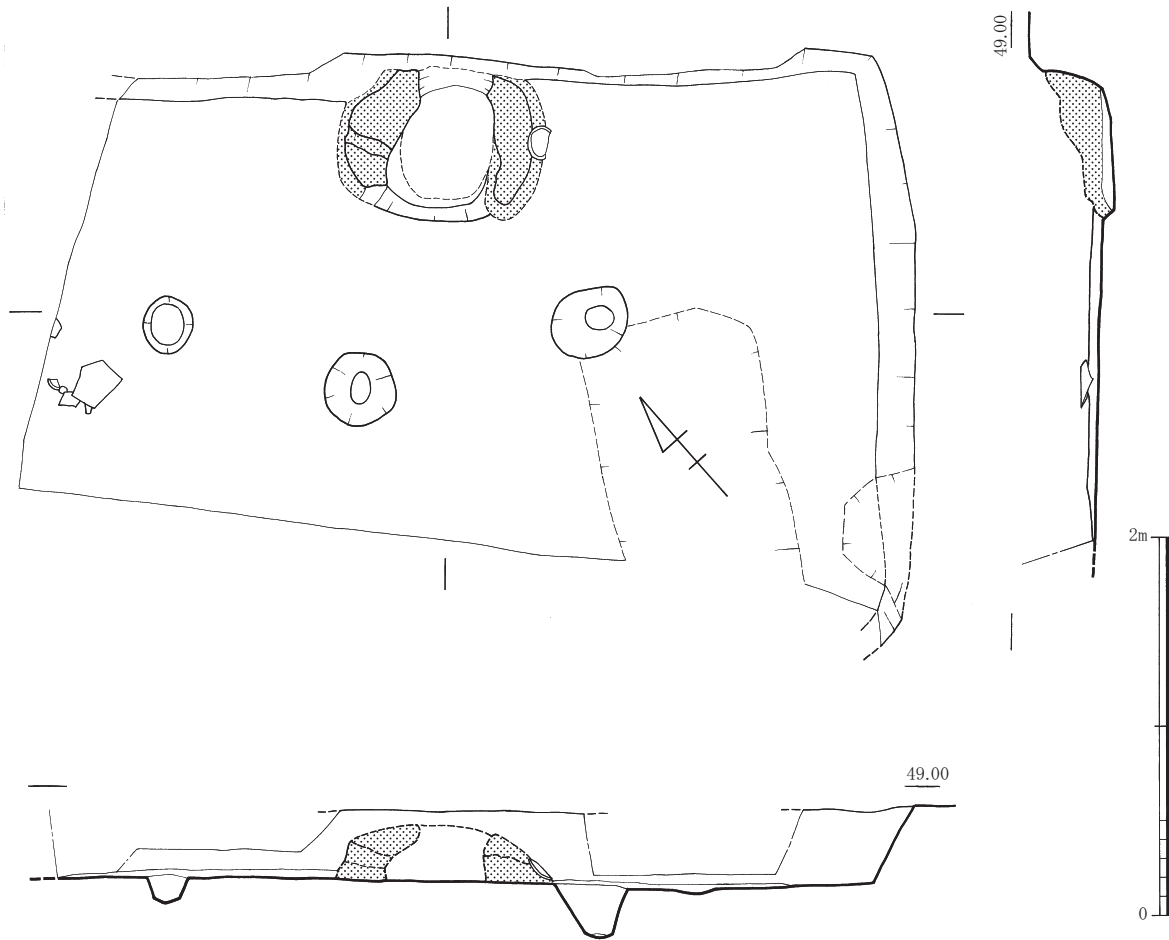
第6図 SC01・02・04出土土器実測図 (1/3)

との境を強く絞って、端部は肥厚させ折り曲げる。天井部外側の狭い範囲をヘラ削りし、他はヨコナデを施す。4は身受けの返りが付いた扁平気味な杯蓋で、返りは短く棘状に付けられ、その端部は受け部から外へ出ない。天井部の器壁は厚めだが、口縁部は薄くて、その境は極端である。天井部外面をヘラ削りし、他はヨコナデで調整される。天井部外面にヘラ記号が認められる。5は身受けの返りが付かない扁平な蓋の細片資料である。器壁はほぼ均一で、端部を小さく下方に引出し、断面三角形を呈する。

杯身(6)小さく外方へ跳ねる高台を持つ。直線的に伸びる口体部は器壁が均一で、全体的にヨコナデ調整される。焼け歪で器形は大きく歪み、体部外面中位に他器種の残片が融着している。

SC03 (図版3、第7図)

Ⅱ区の調査区西端で検出した。攪乱や他の遺構との切り合いで、不明確な点も多いが、大まかには竪穴建物の半分程度は確認できた。東壁にカマドを造り付けるもので、カマドが壁の中央に付くとすると、東壁長約4.5mの規模といえる。建物壁の残存は南壁で40cmを残すものの、他は攪乱を受けたり調査区外であったりで、残存状態は良くない。床面は水平で、固く踏みしめられており、一部に地山の黒色荒砂と白色砂質土を混ぜて固めたような箇所が観察できた。検出した範囲では、ベッド状遺構等は確認できなかった。床面には3個のピットが検出できたが、建物の主柱穴かどうか判断がつかない。カマドは1×0.8mの楕円形で、床面から30cmほどの高さを検出したが、被熱して赤色ないし赤橙色を呈する。カマド中央部床面は一段深く掘り込み、地山および、壁面も熱を受け赤変し、焼け締まっている。出土遺物は須恵器、土師器が埋土中から出土したが、



第7図 SC03 実測図 (1/40)

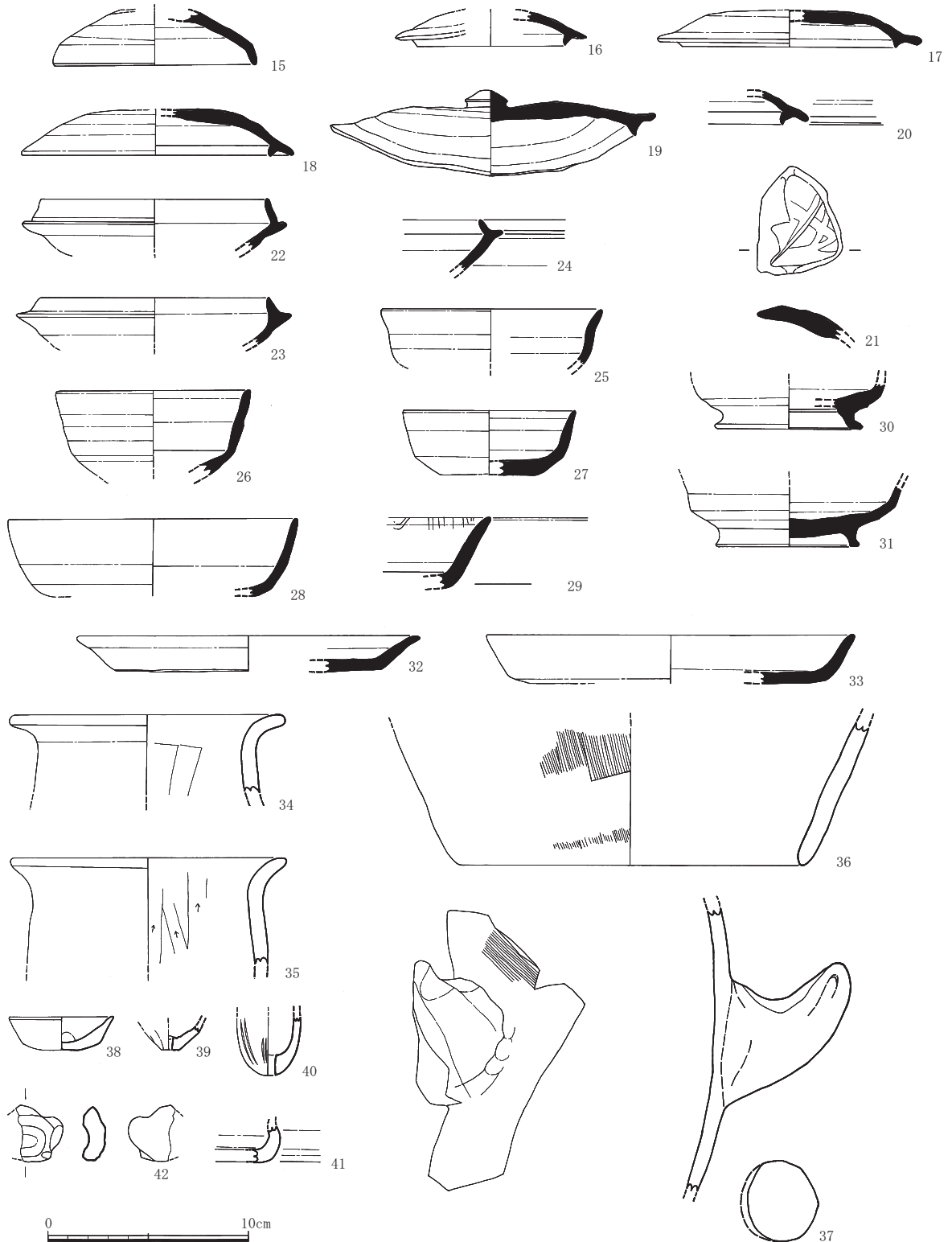
カマドに向かって右袖外壁面に貼り付くように須恵器杯身が、西隅の床直上から須恵器甕腹片が出土した。また、カマド周辺から甑の断片、ミニチュア土製品も出土している。

出土遺物 (図版5、第8・10図)

須恵器

杯蓋 (15~21) 15は身受けの返りの付かない蓋で、口縁部を屈曲させ外面に鈍い稜を造り出す。天井頂部を欠くが、全体的に丸みを帯びる。16~20は身受けの返りを持つ蓋で、いずれも先端が受け部から下方へ飛び出す形態のものである。16は小型で他器種の蓋も考えられるが、返りが受け部より大きく突き出す形態である。全体的にヨコナデ仕上げし、器壁は薄く仕上げる。17は返りが短めで、受け部からの突き出しは僅かである。天井部はほぼ平坦で、緩やかに湾曲させて口縁部とし、受け部は外方へ大きく引き出している。天井部外面はヘラ削りし、他はヨコナデで仕上げるが、天井部内面はナデている。いずれもカマドから出土した。18は受け部から返りの先端が僅かに突き出す。天井部外面はヘラ削り、他はヨコナデされる。床面直上から出土した。19はカマド壁に密着していたもので、焼成時に大きく焼け歪んでいる。一部を欠くが全容が知れる資料で、天井部に擬宝珠状のつまみが付く。天井部外面はヘラ削り、他はヨコナデである。黒灰色で焼成は堅緻である。20は身受けの返りの断片資料である。器壁は全体的に薄く仕上げられ、返りの先端を小さく下方に引き出す。21は天井部の断片で、黄灰色で焼成は甘い。外面に一文字のヘラ記号が残る。

杯身 (22~31) 22~24は蓋受けの立ち上がりを持つもので、何れも小片である。22は細身の立ち上がりがほぼ直立する。23はカマドからの出土で、断面三角形の短く太い立ち上がりを持つ。24は口体部、立ち上がりとも器壁は均一に仕上げられる。25~31は蓋受けの立ち上がりの無いものである。25は口体部の断片資料で、器壁が薄く、ゆるくS字状に湾曲する口縁部である。26・27は



第8図 SC03 出土土器実測図 (1/3)

小型で、高台は付かない。26は口縁部と底部の境が屈曲し底部は厚い。やや中膨らみの口体部である。27は小型品で、床面直上から出土した。底部外面はヘラ切り未調整で、他はヨコナデで仕上げる。焼成は甘く、淡い茶褐色を呈する。28は器壁の薄い口縁部で、内外ともヨコナデで調整する。29は直線的に外反する口縁部で、端部は尖り気味に仕上げ、内面には火襷様の黒変が認められる。30は高台端を屈曲させ外方へ引き出す。高台貼り付け部の外面は貼り付け痕が小さな段として明瞭に残る。黒灰色で焼成良好である。31は高台部のみ完存する。高台は細身で端部が僅かに外方へ跳ねる形態を示す。底部と体部の境は屈曲し、外面に明瞭な稜を作り出す。底部外面はヘラ削り、内底部ナデ、他はヨコナデにより調整される。内外とも黒灰色で焼成は堅緻である。床面直上からの出土である。

皿 (32・33) 32は外反する口縁部で、端部を更に外反させる。底部外面はヘラ切り未調整、口体部はヨコナデで仕上げる。口縁部と底部の境は内面を強く一回転ナデており、凹線状となる。底部外面には板状圧痕が残る。黒灰色で、焼成は良好である。33は底部から直立気味に外反する口縁部で、端部が僅かに開く。口縁部内外はヨコナデ、底部は内面がナデ、外面はヘラ切り未調整である。底部に板状圧痕が残る。灰色で焼成は軟質である。

土師器

甕 (34・35) いずれも口縁を短く折り曲げる小型の甕である。34は直線的な胴部に器壁の厚さを変えずに折り曲げて口縁部とする。外面と口縁部はヨコナデ、内面の頸部以下は縦方向のヘラ削りである。35は頸部下がやや膨らむ。口縁部はゆるく外反し、端部は尖り気味に仕上げる。体部外面には僅かにハケ目が残る。内面は頸部下まで荒い縦方向のヘラ削りが施される。内外とも暗橙色で、外面にススが付着している。

甔 (36・37) 36は甔の基底部の破片資料である。ほぼ直線的に外上方へのびるが、基部端の器壁が膨らみ気味である。外面に縦方向のハケ目が残るが基底部は未調整で、内面は横方向のヘラ削りが認められる。内外とも明橙色で、基底部に黒斑がある。37は把手の資料である。比較的薄い体部に嘴状の把手を貼りつけている。把手の断面を観察すると、最初に一回り小さな把手を器体に貼り付け、その上に更に粘土を巻きつけて一回り大きな把手としている。器面は外面がハケ目、内面がヘラ削りで仕上げられている。黄橙色で焼成は軟質である。

ミニチュア土器 (38～42) いずれもカマド内埋土から出土した。38は杯を模したもので、手捏ねである。39・40は底部に穿孔し甔を模したものと思われる。41は小壺を模したもの。頸部から底部の破片資料である。いずれも赤褐色を呈し、胎土精良で、焼成良好である。42は中央を指頭で押さえ窪みを作っている。窪みの廻りはU字型に熱を受けて黒変しており、鑄型の様相を呈し、反対面は棒状のもので押さえ、中央に稜を作る。胎土は精良であるが、1mm程の白砂粒を含む。赤褐色を呈し、焼け締まっている。

不明土製品 (第10図、43・44) 2点ともカマド周辺から出土した。43は断面を観察すると、赤褐色と白色が層をなしている。その動きから、図の下半部を引きちぎった様子が窺える。この反対側の面は更に被熱して灰白色を呈している。胎土は精良で、片面は明赤茶色である。44は棒状の圧痕が両面に残る。図の上半は角張った棒状の痕跡を残す。胎土は他と比べると粗く、2mm程の白砂粒

を多く含む。灰色を帯びた橙色で、焼成はやや甘い。

SC04 (図版3、第9図)

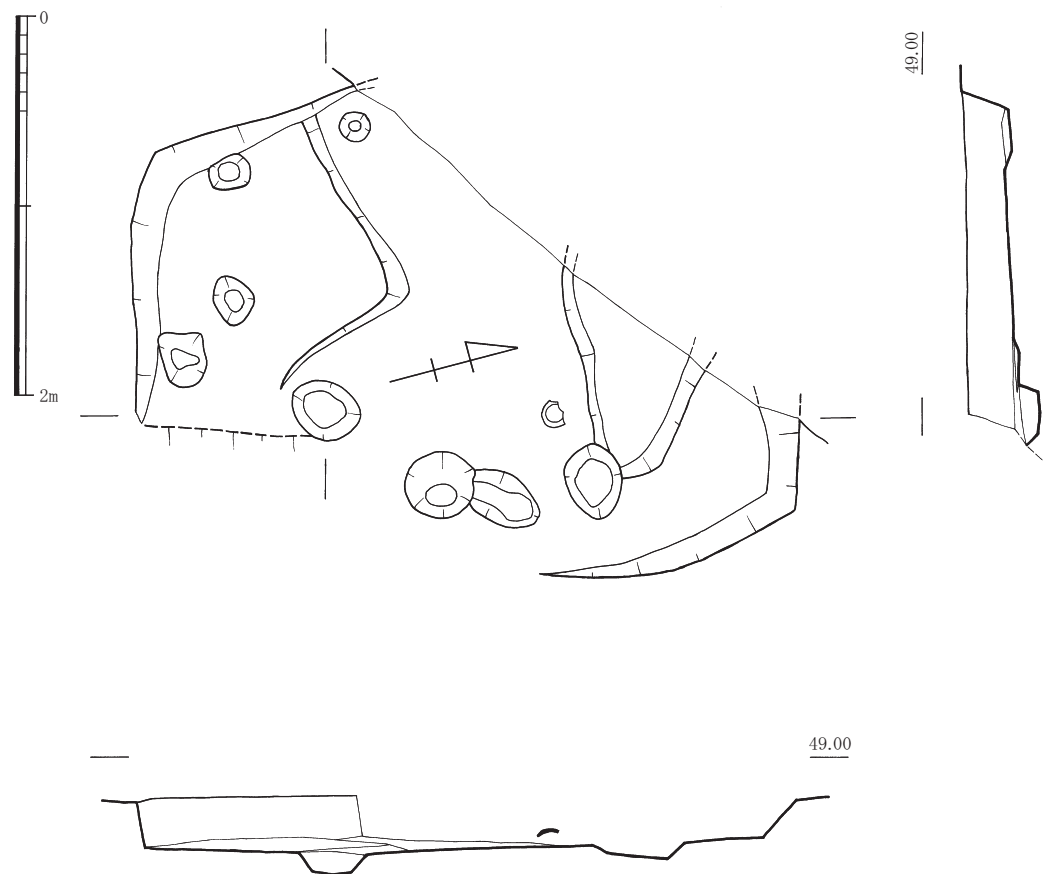
Ⅱ区のSI03のすぐ東側に検出した長方形の小型の竪穴建物である。旧宅の進入路として切り下げられていた箇所であるので、すでに削平され建物の南東隅は消滅している。また、北西部分は調査区外に延びており全容は知れないが、検出した部分から復元すると長辺が3.5m、短辺が2.6mの規模が考えられる。壁高は約20cmが残り、壁面は直立する。床面には北西隅に1m×1mの段を造る。北東側には細長い土坑状の浅い掘り込みがあるが、大部分は調査区外で、全容は知れず、住居に伴うものかどうか不明である。床面には8個のピットを検出したが、いずれも10~20cmの深さで、建物に伴う柱穴は不明と言わざるを得ない。

出土遺物 (図版5、第6、10図)

須恵器

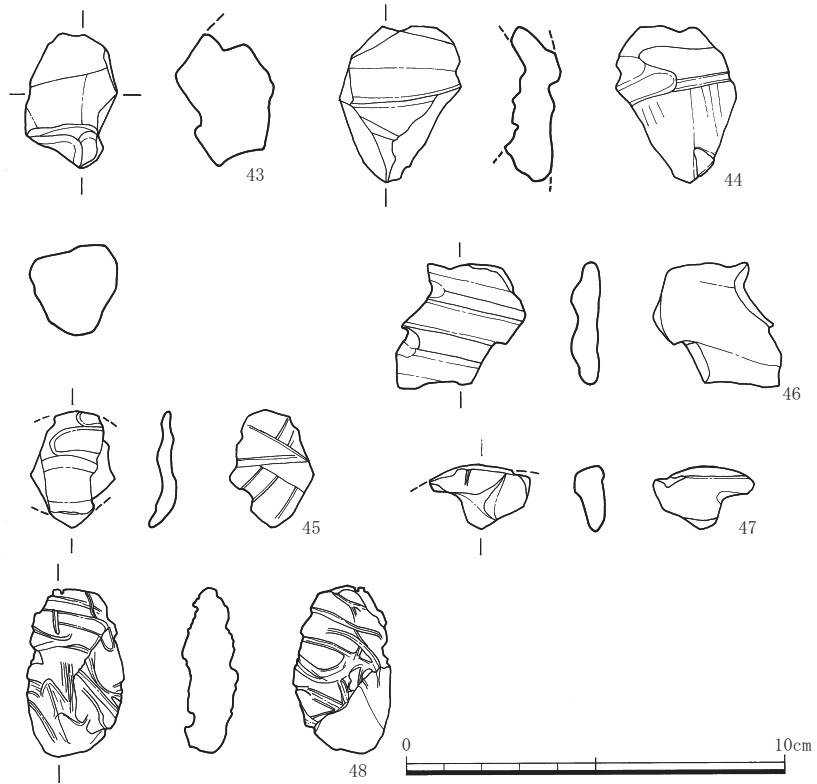
杯蓋(7) 身受けの返りが付かないもので、口縁部は角状に下方へ折曲げる。端部外面を強くナデ、体部との境に小さな突起を作る。天井部はヘラ削りされ、平坦面を作る。灰白色で焼成は良好である。

杯身(8~14) 立ち上がりを持つもの(8~11)と、無いもの(12~14)がある。8・9は断面三角形の小さな立ち上がりで、8の外面はヨコナデせず、不定方向のナデが残り、底部はカキ目状の痕跡が残る。灰色で焼成良好である。9は立ち上がり端部が外反し、受け部との境に沈線を廻



第9図 SC04 実測図 (1/40)

らす。受け部は8に比べ長めに引き出す。10・11は立ち上がりの器壁を薄くし、やや長めに引き上げて端部を丸く仕上げる。何れも全体的には扁平な形状を示す。10は内面の口縁部下を強く押して器壁を薄くするが、その境が鈍い稜をなす。11は立ち上がりを受け部内外をヨコナデする他はナデによる調整である。12は蓋受けの立ち上りが無いものである。底部に2mm程の不整な粘土板を貼り、高台様になっているが、潰れて形が乱れている部分もある。底部外面がヘラ切り未調整



第10図 不明土製品実測図 (1/2)

である他はヨコナデ調整される。灰白色を呈し焼成は良好である。13・14は何れも細身のやや高い高台で、端部を外方へ膨らみます。底部は内湾し丸みを帯びる。13は底部外面をヘラ削り、高台及び体部内面はヨコナデ、内定部はナデを行う。内面は灰白色、外面は黄身を帯びた灰色を呈し焼成は軟質である。14は底部外面高台内にヘラ記号がある。色調は表裏とも赤橙色を呈するが、胎内は淡い灰色で、焼成は軟質である。

不明土製品 (第10図、45~48) いずれもチップ状の土製品で、いわゆる焼土塊や炉壁等の断片とは異なり、胎土、焼成、色調ともに焼成良好な土師器と同質である。45は一見、手捏ねの断片のようにも見えるが、一面には植物繊維状の痕跡がある。もう一面は指で押さえた痕跡を残す。46は幅5mm程のチップ状のもので、一面は平滑で、一部に細かい布状の圧痕が見られる。反対面は植物繊維状の圧痕が3条並行して残る。胎土は精製され砂粒は僅かである。赤橙色を呈し、焼成は良好である。47は小片で、46と色調、焼成ともよく似ている。一面に角張った棒状の圧痕が残る。他の面は平滑である。48は他と様相を異にし、細かい繊維質の圧痕が著しい。両面に平滑な部分があり、そこにはいずれも指紋が残っている。焼成、色調とも他と同様であるが、赤黄味が強く、他より熱を受けているかもしれない。4点とも床面からの出土である。

(2) 土坑

今回の調査では、I区、II区合わせて多数の土坑やピットを検出したが、ピットは建物として拾えるものはなく、土坑も浅く不整なものも多かった。ここでは、代表的なものを記述する。

SK02 (図版1、第11図)

I区の西へ延ばした調査区のほぼ中央で検出した。一部は調査区外へ延びるが、楕円形の平面ブ

ランである。短軸で1mを測る。後述するSK03を掘り下げたところで検出したもので、SK03の床面から10cmほどの掘り込みである。埋土中から土器片が出土したがいずれも細片で、図化できなかった。

SK03 (図版1、第11図)

SK02と切り合って検出した。北辺は調査区外に延び全容は知れないが、一辺が2m程の方形プランを呈すると思われる。残存深さは20cm程度で床面は平坦である。本遺構の埋土とSK02の埋土は似ており、両遺構の先後関係は不明である。埋土中より須恵器・土師器片が出土した。

出土遺物 (第12図)

須恵器

杯蓋 (49) 身受けの返りが無いもので、口縁端部を瘤状に引き出す。内外ともヨコナデされ、黒紫色を呈し、焼成はやや甘い。

杯身 (50) 蓋受けの立ち上りを有する。立ち上がりは短く、薄く引き上げられ、端部を小さく直立させる。受け部も小さく、口縁部はくの字状をなす。胎土は精良で、砂粒は僅かである。灰白色を呈し、焼成良好である。

土師器

杯蓋 (51) 身受けの返りがなく、口縁部先端を下方へ折り曲げるもので、須恵器と同形である。内外とも粗い回転の磨きを施す。赤橙色で、焼成は良好。胎土は精良で砂粒を含まない。

SK05 (図版1、第3図)

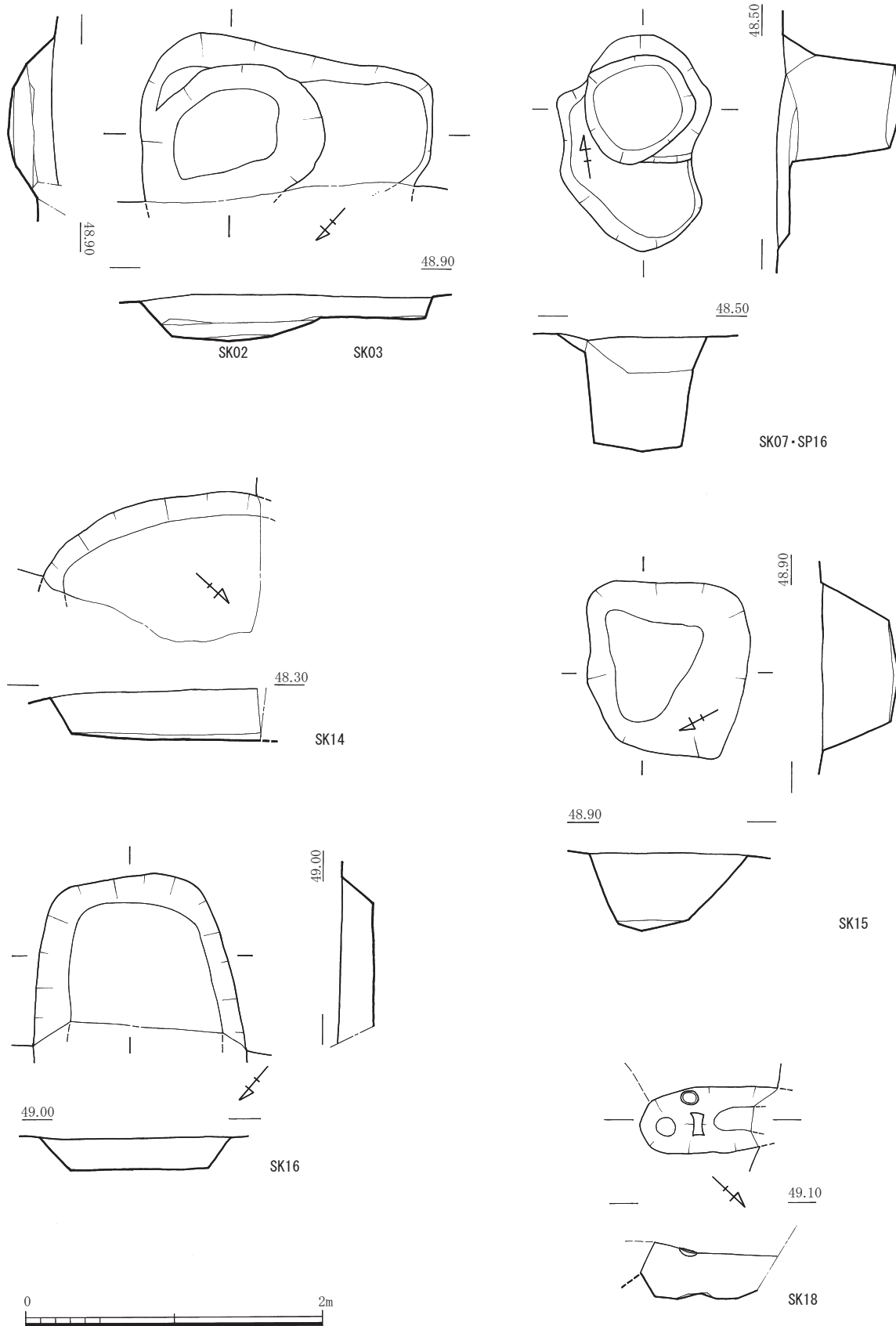
I区西調査区の中央付近、SK02の南側に検出した遺構だが、新期の攪乱や木の根の攪乱の狭間に僅かな立ち上りを検出した。土坑或いは住居跡のコーナーと思しき部分を確認できたがその他については不明確である。

出土遺物 (第12図)

須恵器

杯蓋 (52) 口縁部の破片資料である。口縁端部を下方へ小さく折り曲げる。端部外面は沈線状に窪みを廻らし、端部上位に小さな突起が生じている。内外ともヨコナデされ、茶色を帯びた灰白色で、焼成は良好である。

杯身 (53~57) 53は蓋受けの立ち上りを持つもので、端部を小さく上方へ引き上げ、その基部と受け部との境は沈線状となる。灰色で、焼成は良好である。54~56は低い断面長方形の高台の付くものである。高台畳付部は、ほぼ水平に接地する。54は僅かにS字状に開く口体部で、端部は丸く仕上げる。暗灰色で、焼成良好である。55はやや器壁の厚い底部から器壁を薄くしながら直立気味に開く口体部である。口縁端部を欠く小片資料だが、復元すると高台径約12cmを測る。高台は内底側が斜めに上がる台形状をなす。灰色を呈し焼成は良好である。底部外面は黒色化している。56は内湾気味に直立する口縁の上半を外反させる。内外ともヨコナデ調整されるが、底部外面は水平にヘラ切りされ、ヨコナデは及ばない。板状圧痕が残る。色調は外面が灰色、内面が白色の強い灰色で焼成は良好である。57はS字状に湾曲する口体部の小片である。内外ともヨコナデされ、灰色で焼成良好である。



第11图 土坑实测图 (02·03·07·14~16·18) (1/40)

棒状製品 (58) 断面が正方形に近い柱状の須恵器で、所謂三足壺の脚とされるものと類似するが、4面のうち、相対する二面には回転によるヨコナデが認められ、一方には高台を貼り付けたか、あるいは貼り付けようとした切込みがあり、反対面は半分強がヨコナデをナデ消している。また、この面の端部は屈曲し立ち上がりかける。残りの二面はヘラ状工具で切り取った痕跡が認められ、4つの角の一つだけを小さく面取しているものの他は切り離れたままである。これらの観察から本品は大型の盤のような器の底部を直径方向にヘラで切り取ったものと推定され、三足壺等の脚片というより、窯道具の一種であるかもしれない。

SK07 (図版1、第11図)

I区北隅で検出した不整形の浅い土坑で、調査中、SP16としたピットと合わせて図示した。両者の切り合いはわからず、周辺の浅い不整形の窪み等と一連の遺構の可能性があるので、この部分を取り上げた。I区の北半は黄褐色系の包含層が厚く堆積しており、焼土やフィゴの羽口、鉄滓片などが含まれ、何がしかの焼成関連遺構の崩壊土が堆積していたようで、炭化物や焼土を除去した結果、不整形な落ち込みが検出できたものである。性格等については不明である。

SK14 (図版1、第11図)

I区北西隅に検出した土坑で、弧状のプランの一部を検出した。大部分が調査区外で、全様は知れない。調査途中では、遺構面が東方へ落ちる谷地形で、先に述べた炭化物や焼土を含む包含層の落ち込みとして掘り下げたが、弧状の立ち上りが確認でき土坑として認識した。深いところで35cmを測るが、床面は東方へ傾斜してさらに調査区外へ深くなると思われる。

出土遺物 (図版5、第12図)

須恵器

大甕 (59) 小さな二重口縁をなす口縁部片である。口縁の屈曲部はゆるく立ち上り、端部は丸く、外方へ水平に突き出す。外面には強いヨコナデにより、小さな凸線が廻る。胎土は精良で砂粒は少ないが、茶色斑が多く認められる。暗灰色で焼成はやや軟質である。

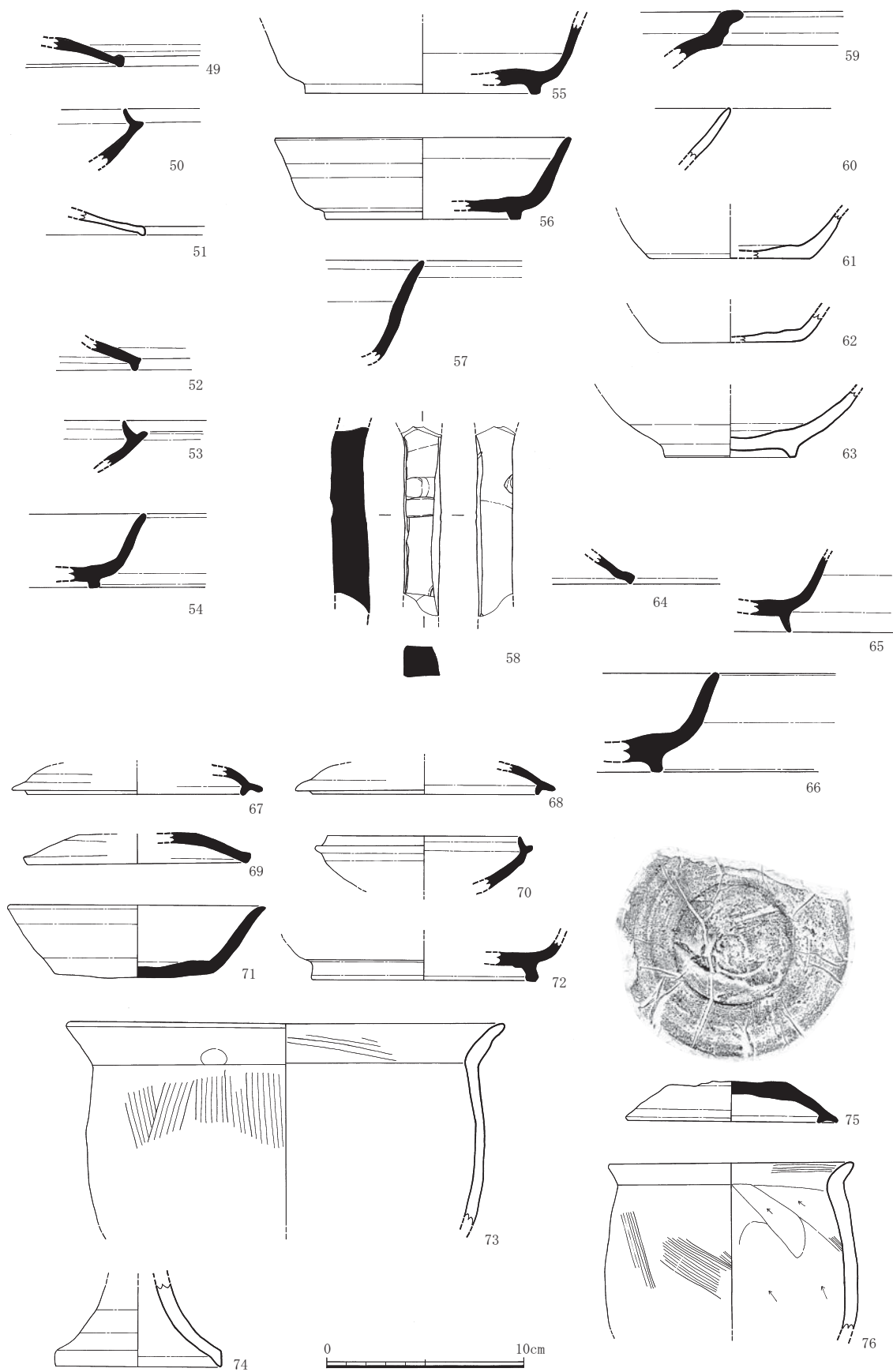
土師器

杯 (60~62) 60は口縁部の小片である。直線的に開き、端部は丸く仕上げる。内外ともヨコナデされ、淡黄橙色で、焼成は軟質である。61は口縁端部を欠く資料である。底部はヘラ切り未調整で他はヨコナデされる。外底部に板状圧痕が残る。内底部は強くナデ、器壁を薄くしている。乳橙色で、焼成は軟質である。62は底部の小片である。外底部はヘラ切り未調整、他はヨコナデである。灰橙色で、内部が黒色化しているところもあり、焼成はやや硬い。

椀 (63) いわゆる内黒土師器椀である。端部が丸く低い高台を持つ。内面は黒色で細かい不定方向のミガキが施され、光沢が残る。体部は内湾気味に立ち上がるが端部は欠いて不明である。外面の調整は底部ヘラ切り未調整、他はヨコナデを施す。色調は黄橙色を呈するが、底部外面は黒斑ができるほど焼成は硬質である。

SK15 (図版1、第11図)

I区の西調査区端のSI02に隣接して検出した。一辺が1.2mのほぼ正方形に近い方形プランで、深さ50cmを測る。土坑下端ラインが不整だが、断面は台形を呈する。埋土は黄茶色の砂質土で砂と



第12图 土坑出土土器实测图 (1/3)

いった方が近い状態である。埋土中から須恵器・土師器の小片が出土した。

出土遺物（図版5、第12図）

須恵器

杯蓋（64）身受けの返りの無い蓋で、口縁部端を小さく折り曲げる。口縁端から5mm程の外面に重ね焼きによる他器の口縁部片が融着している。黒灰色を呈し焼成は良好である。

杯身（65・67）65は細身の高台が尖り気味に先端を外方へ撥ねる形態を示す。口縁端部を欠損するが、内湾しながらS字状に屈曲して開く口縁部である。色調は内面が灰色、外面は黄橙色を呈しており、焼成は軟質である。66は高台から口縁部端の一部までかろうじて観察できる資料である。端部は丸みがあるが、断面は方形に近い高台を有する。口体部は内湾しながらS字状に湾曲して広がる形態を示し、口縁端部は丸く仕上げる。内面は灰色、外面は暗橙色を呈し焼成は軟質である。両者は外面の表層のみ黄色化していて、一度還元焼成したものを外面のみ酸化炎焼成した様子が窺え、意図的に作られた製品と思われる。

SK16（図版1、第11図）

Ⅱ区のSC03とSC04の間で検出し、SC03の上層を切っている土坑である。北辺が調査区外に延びて全容は知れないが、一辺が1.2m程の正方形に近い方形プランを呈すると思われる。深さは約25cmが残り、床面はほぼ水平である。埋土はSC03、SC04とよく似ており、見極めが難しかったが、調査区内では比較的須恵器、土師器の出土量の多い遺構である。

出土遺物（図版6、第12図）

須恵器

杯蓋（67～69）67・68は身受けの返りが付くもので、いずれも小片の資料である。器壁は薄く、棘状の返りは尖り気味で、その先端は受け部より下方に突き出す。67の色調は内外とも表面は灰褐色で、内部は灰色を呈し、焼成は軟質である。68は全体が灰色だが、内面は橙色を帯びている。69は返りの無いもので、小片資料である。口縁端部を小さく瘤状にする。下方への突き出しは小さく端部との境が小さな沈線状となる程度である。調整はナデを主とし、天井部はヘラ削りが認められる。色調は赤褐色を呈するが口縁部は黒灰色を呈し、焼成は軟質である。色調から土師器と迷うところであるが、ここで扱った。

杯身（70～72）70は蓋受けの立ち上りを持つもので、端部を小さく直立させる。外面の受け部下は屈曲させ稜をなす。71は口縁の一部を欠くのみで、完形に近い資料である。若干丸みのある平底に直線的に外反する口体部が付く。口縁部は内外ともヨコナデされ、内底は強めのナデ痕跡を残す。外底部はヘラ切りのみで、ハケ目状の痕跡が不定方向に多く残る。72は断面長方形のやや高めの高台で、端部は丸く外方へ膨らむ。内底部は不定方向のナデ、他はヨコナデによる調整である。高台畳付に細い棒状の圧痕が残る。暗灰色で、焼成は良好である。

土師器

甕（73）胴部は僅かに膨らみ、くの字に外反する口縁部が付く。胴部内面はヘラ削りにより器壁を薄くするが、口縁部は肉厚である。胴部外面にはハケ目が残り、内面はヘラ削りの後ナデ、口縁部内面にはハケ目が残る。外面は2次的に被熱し、内面には炭化物痕が残る。

赤焼き土器

高杯 (74) 小型の高杯の脚部片である。脚裾端を下方へ折り曲げ、端部は尖らず。内外ともヨコナデ調整される。色調は内外とも赤褐色で、焼成は堅く焼き締まっている。形態、調整は須恵器そのもので、色調が内部まで赤橙色であり、所謂赤焼き土器とした。

SK18 (図版4、第11図)

Ⅱ区調査区東端で検出した溝状をなす遺構である。調査区の南東部は新期の攪乱により大きく削平され、遺構も北方は調査区外となって全様は知れない。南北に延びる溝の可能性もあるが、ここでは土坑として扱う。幅40cmで、長さ80cmほどを検出した。現存する深さは30cmほどである。南東端部はピットが切り込んでいるかもしれない。壁面に貼付くように完形に近い杯蓋が出土している。

出土遺物 (図版6、第12図)

須恵器

杯蓋 (75) 口縁部の1/3を欠くが全様の知れる資料である。土坑の壁面に貼り付いて出土した。身受けの返りが付くもので、小さな棘状の返りの先端が僅かに受け部より突き出すものである。返りの基部には沈線状が廻る。天井部外面はヘラ切り未調整で、ヘラの入りと出が一致せず段をなす。更に、余分な粘土を掻き落すカキ目状の痕跡が乱雑に残る。天井部内面に不定方向のナデが認められる他、ヨコナデによる仕上げである。天井部外面に弧状のヘラ記号がつけられる。

土師器

甕 (76) 胴部が若干膨らみ、小さく外反する口縁部が付くものである。頸部外面は明瞭な線が廻り、内面はヘラ削りして頸部を明確にしている。胴部外面にハケ目、内面はヘラ削りして器壁を薄く仕上げている。口縁部は内外ともヨコナデされる。内面には炭化物が付着し黒色化する。

(3) その他の遺物 (図版6、第13・14図)

本調査では遺構面に到達するまでに土器を主に遺物を含む包含層が認められた、特にⅠ区とした調査区の東半はかなり厚く堆積しており、焼土やフィゴの羽口片、鉄滓片が混じるなど、他と異なる様相を呈していた。以下、主だった遺物についてふれる。

須恵器

杯蓋 (77~83) 77は破片資料で、口縁部は僅かに屈曲し、端部を丸く仕上げる。天井部外面の狭い範囲をヘラ削りする他、他はヨコナデ調整である。78は返りが受け部より僅かに突き出す。天井部外面にヘラ記号を付ける。79は返りがなく、端部を下方に折り曲げ、天井部との境は明瞭な稜をなす。80は全体的に扁平な形である。口縁端部は内傾する平坦面をなす。端部外面は小さく外側につまみ出された形態をとる。天井内面に重ね焼きの痕跡を残す。口縁端部の形態から高杯の杯部の可能性もある。81・82も身受けの返りがなく、擬宝珠形のつまみが付いている。81は口縁部をほとんど折り曲げず、肥厚させて端部外面に平坦面を作る。全体的に扁平な形態を示す。83は小片であるが、全体が復元できる資料である。つまみは上げた擬宝珠状をなす。身受けの返りは小さく棘状に付けられるが、受け部から飛び出さない。天井部は外面が肩部まで及ぶヘラ削りがされ、内面は不定方向のナデである。色調は内面が返り先端まで茶褐色で、外面は返りの先端外側から灰緑色を呈している。

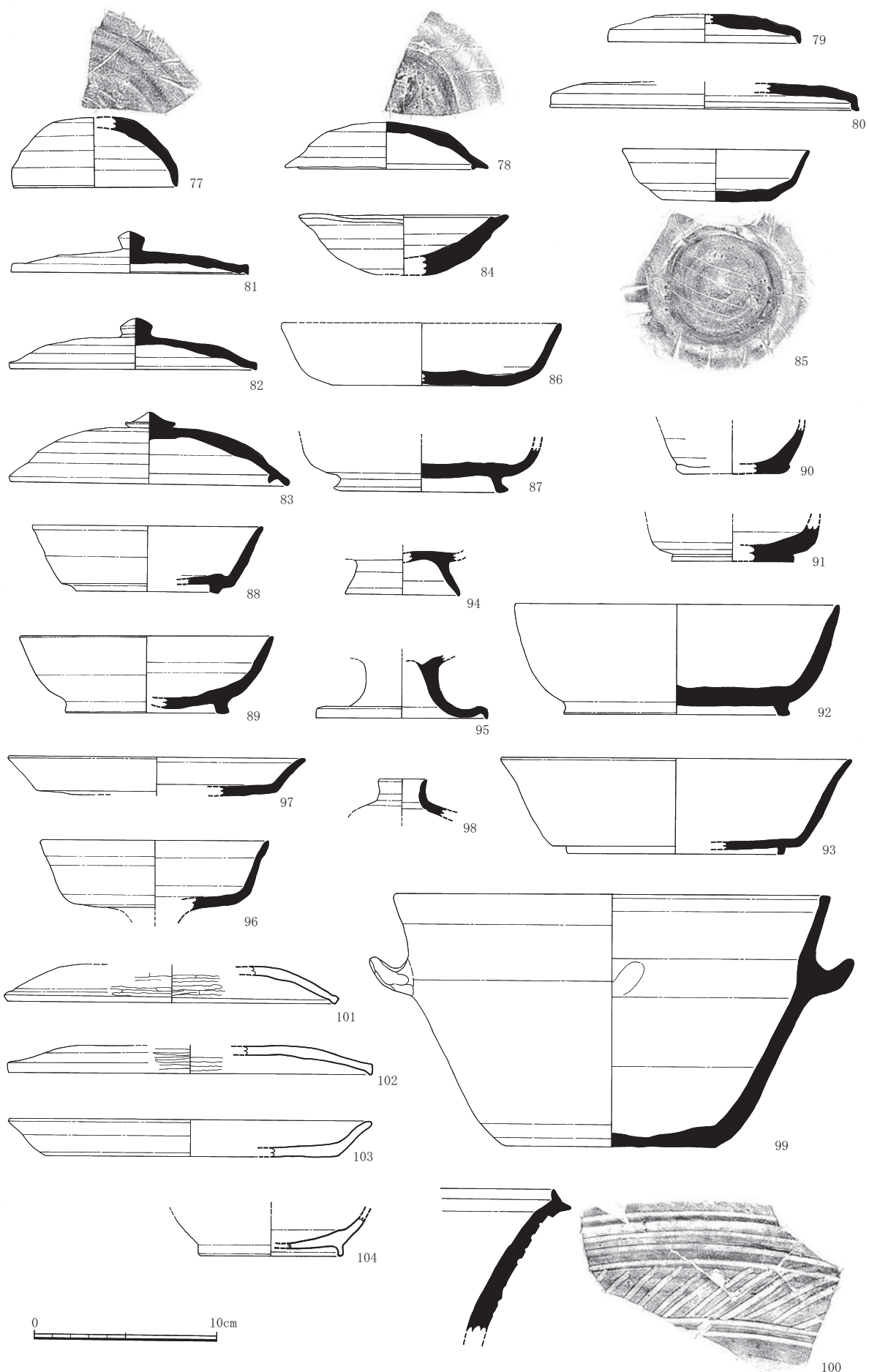
杯身（84～93）84は特異な形態をとるもので、立ち上りを付けない杯身の形を示すが、蓋の可能性もある。全体的に球状の形態で器壁は全体的に厚い。口縁端部は中央がくぼむ平坦面が内傾している。体部外面の中程まで雑な回転ヘラケズリを施し、調整は口縁端部内外ともにヨコナデされ、内底部は強くナデる。胎土には少量の白砂粒を含んでいる。黒茶色を呈し、焼成は良好である。85は口縁部の大略半分を欠くが、全様の知れる資料である。平坦な底部から途中で屈曲し、口縁端部は外反しながら薄く仕上げられる。外底部に四条の平行線のヘラ記号を記す。86は平坦な底部から口縁部を立ち上げるが、その境は明瞭でない。底部外面はヘラ切り離しの後、中心付近に残った粘土塊をヘラで削り落としている。内面は不定方向のナデが全面に及ぶ。黒灰色で、焼成は良好である。87は高台端部を外方へ引き出す。端部を欠くが、内湾気味に立ち上がる口縁部である。88は口縁部が中位でわずかに屈曲するものの、ほぼ直線的に開く形態をとる。口縁端部が外側に僅かにつまみ出される。高台は畳付が平坦で僅かに内傾する。黒灰色を呈し、焼成は堅緻である。89は内湾気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸く仕上げる。底部はヘラ切り未調整で、内底に不定方向のナデが認められる。器面に粘土紐の凹凸が著しく残る。90は平底の小杯。底部と体部の境は丸く出張り、高台様の段をなす。黒灰色で、焼成は良好である。91は底部成形時に中央部に空いた穴を修復するために、粘土板を貼り付け、そのまま、台状に残したものである。体部との境には面取り状に手持ちヘラ削りを行う。また、外底面は平滑で、この面を転用硯とした可能性もある。暗灰色で、焼成は良好である。胎土に砂粒は少ない。92は直線的に外方へ開く口縁部である。低い断面方形の高台は外端が僅かに突き出す。93は大ぶりの割には器壁が薄く、高台も小さな断面四角形である。口体部と底部との境には明瞭な稜を有する。口縁部は小さくS字形に屈曲し、端部は僅かに開く。灰白色を呈するが、外面は黒班が認められ、焼成は軟質である。

高杯（94～96）94は短脚の資料で、他器種の脚の可能性もある。ハの字に広がる脚部は、中位で広がりを増し、端部は尖らせる。内外に自然釉の付着が認められる。95は脚の半分ほどが残存する。96とは色調等よく似ており、同一個体の可能性があるが直接接合しない。短脚で、裾を一旦横方向へ引出し、端部を膨らませる。更に端部は短く嘴状に下方へ折り曲げる。96は杯部底から湾曲して立ち上がる口縁部で、端部下1cm程のところから更に外反し、内面に鈍い稜を形成する。

皿（97）平坦な底部に器壁の厚さを変えずに外反する口縁部が付くものである。口縁端部は更に開き気味に丸く仕上げる。底部外面はヘラ切り後、粗く不定方向にナデるが、辺々部に板状の圧痕が残る。青味を帯びた灰色で、焼成良好である。

小瓶（98）小型の瓶の口縁部から肩部にかけての断片資料である。口縁部は短く、直立気味に僅かに外反する。端部は尖り気味に丸く仕上げる。頸部内面には、口縁部を貼り付けた際の小さな段が残る。灰色を呈し、焼成は良好。

鉢型土器（99）平底で口縁部下に小さな把手が付く。破片資料であるが、口縁部から底部まで接合し、全様を復元できる。平坦な底部から直線的に開く体部は、口縁部で器壁を僅かに厚くし、端部は内傾する平坦面をなす。口縁部下4cm程の所に貼り付けられる把手は扁平な粘土塊を上方に角状に引き出す。口体部内外はヨコナデ、底部は外面が胴部との境付近からヘラ削り、内底は横方向のナデによりそれぞれ調整される。把手は調整が終わった後貼り付けられており内面に貼り付け



第13图 包含層出土土器実測図 (1/3)

時の指の圧痕が残る。胎土に砂粒は少なく、淡灰色で焼成は軟質である。

甕 (100) 大甕の口縁部片である。大きく外反する口縁部は上端に蓋受けの立ち上り状の突起を突き出させ、杯の受け部の形態を示す。外面には口縁下に三条、3 cm程下位に二条のやや幅広の凹線を廻らす。この間に斜行線文が入られるが長さ、間隔とも雑に施される。

土師器

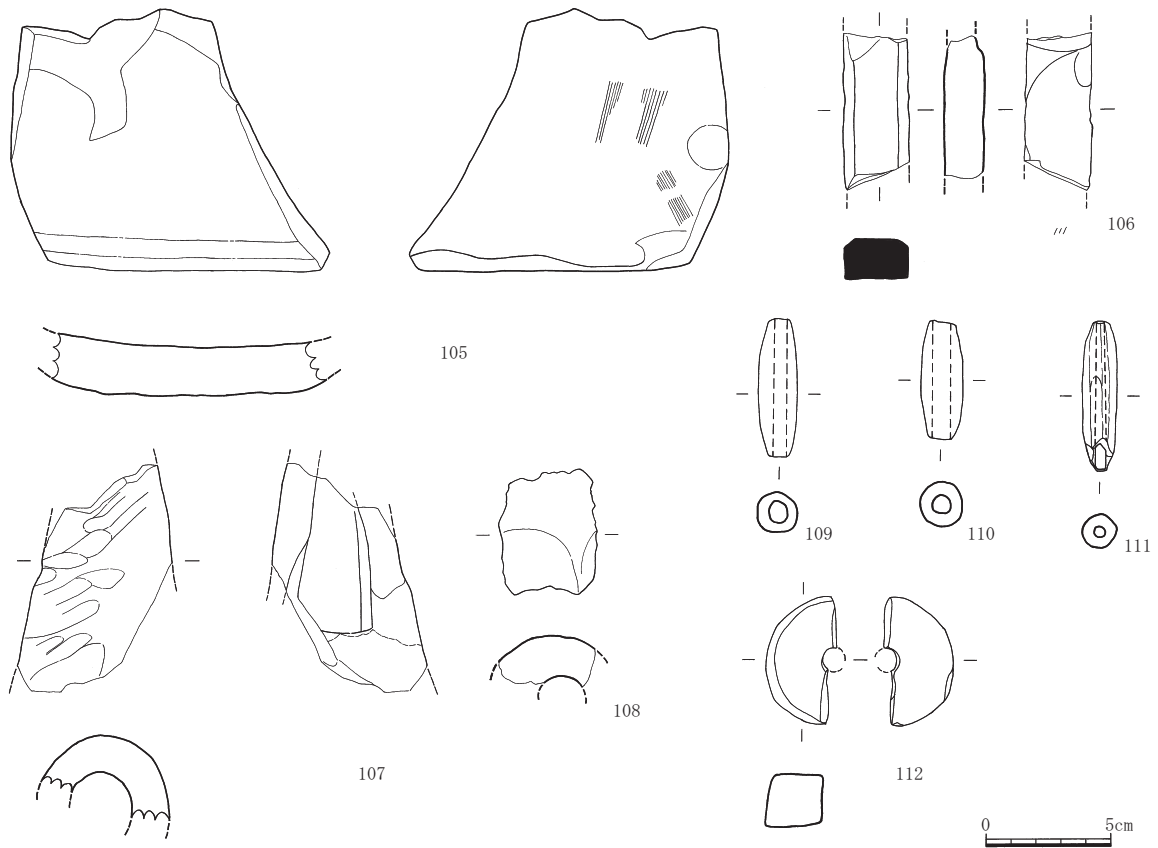
杯蓋 (101・102) いずれも身受けの返りが付かない形態のものである。101は口縁端部を僅かに折り曲げるが、小さく肥厚させる程度である。天井部外面をヘラ削りし、他はヨコナデした後、全体的に回転による研磨を加えている。胎土は精良だが僅かに細砂粒を含む。赤褐色で、焼成は良好である。102は口縁端部を小さく下垂させる。外面は暗文状に回転の研磨線が入る。胎土は精良で砂粒は少ない。赤褐色で焼成良好である。

皿 (103) 平坦な底部から外反して広がる短い口縁部を持つもので、底部外面は丁寧なヘラ削り、他は回転による磨きが粗く施される。内面赤橙色、外面は茶褐色を呈し、焼成良好である。

椀 (104) 椀の高台部分の資料である。内湾する口縁部に細身の高台が付くもので、高台端部は僅かに内側に肥厚する。底部はヘラ切り未調整で、他はヨコナデ調整される。焼成は軟質である。

瓦 (105) 平瓦で、小口の部分を残す破片資料である。小口は平坦にヘラ削りされ、凹面側は小口を2度面取りする。タタキの痕跡はない。明黄褐色を呈し、焼成は軟質である。

棒状製品 (106) 断面が長方形を呈する棒状の製品である。全体を丁寧にヘラ削りしているが、



第14図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

一面は両角を削り落とし、もう一面は端部に接合痕があり、その部分は弧状に削りを入れている。横瓶等の把手か三足土器の脚片と思われる。黒灰色を呈して焼成は良好である。

羽口（107・108） 107は裾がラッパ状に開くもので、外面に指で押さえた痕跡が多く残る。破片の上半外面は黒灰色に強く被熱する。内面は赤褐色で、被熱の度合いは低い。108は先端付近の破片である。I区東半の焼土の混じる包含層から出土した。

土錘（109～111） 111が先端を欠くが他は完形品である。両端はヘラ状の工具でカットし、平坦面としている。何れも赤褐色で、焼成は良好である。111はII区の遺構検出時に、他はI区西半調査区の包含層から出土した。

紡錘車（112） 土製でやや厚みがあり、断面は台形を呈す。全面を研磨して、平滑に仕上げる。茶褐色で焼成は良好である。I区中央付近の包含層出土。

IV. まとめ

今回の調査では不明確なものも含むが、4棟の竪穴建物を検出した。その内3号竪穴建物では床直上やカマドに貼り付いて須恵器が出土しており、それによると牛頸編年案でいうV期を中心とした時期が考えられ、他の建物も同様の年代観が与えられる。また、一部の土坑や調査区の北部で認められた包含層から出土した須恵器はⅦ期を中心としており、このような在り方は、本遺跡で過去3回実施した調査でも同様であり、更に、隣接する日ノ浦、塚原遺跡とも内容や造営時期が同一で、これら3遺跡は名称こそ異なるものの牛頸川と平田川が合流して形成した比較的広範な微高地上に成立した規模の大きい集落と位置図けられよう。

ところで、日ノ浦、塚原両遺跡は報告書が刊行され、遺跡のⅡ期（7世紀代）が竪穴建物の最盛期と位置づけ、その後、集落は8世紀前後を境に竪穴建物が減少することから報告者はムラの衰退を考えたが、掘立建物や廃棄土坑が増加することやムラの成立要因を考えると、この時期にムラの役割が変化し、建物も竪穴から掘立へと替わっていった結果だと考えられる。

そもそも、この微高地は6世紀前半代を中心とする古墳群が営まれ、その墓域を侵食する形で6世紀後半以降に集落が成立したものである。成立の要因としては、須恵器生産集団の存在もあるが、中・近世には“太宰府詣で”の道として使われた、怡土方面～日向峠～小笠木峠を経て那珂川市域から梶原峠を越え牛頸～大佐野～太宰府に至るルートの要衝にあることが大きい。梶原峠の那珂川側入り口周辺には平蔵遺跡、下梶原遺跡、龍頭遺跡など同時期の遺跡が営まれ、すでにルートが成立していたことが窺える。竪穴建物を主とする時期は須恵器生産をはじめ、鉄滓、土錘、鉄器、紡錘車などの出土品が示すムラの様相が想像できるが、8世紀を過ぎるころになると石帯、硯、刀子、権、鉄鏃などの遺物が示すように役所的な様相へと変化するようである。この変化は太宰府に供給する須恵器生産の集積場としてなのか、あるいは梶原峠を意識した太宰府防衛の一端を担うのか、紙面の都合で短兵急な記述になったが今後検討を進める端緒としたい。

圖 版



調査地遠景



I区調査区全景



II区調査区全景



SC01・02



SC03完掘後



SC04完掘後



SC03カマド細部



SK01土器出土状態



SK18



3



31



4



32



6



37



18



45 46 47 48 43 44



19



59



27



63



報告書抄録

ふりがな	はたがさかいせき 1								
書名	畑ヶ坂遺跡 1								
副書名	第 4 次調査								
巻次	1								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第170集								
編著者名	澤田康夫								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1								
発行年月日	2019年 3月29日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
はたがさかいせき 畑ヶ坂遺跡	福岡県大野城市畑ヶ坂1丁目64		402192		33° 30′ 14″	130° 28′ 05″	2018年 1月24日 ～ 3月8日	130㎡	民間 宅地 開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
はたがさかいせき 畑ヶ坂遺跡	集落等	古墳時代 後期 ～ 奈良時代	住居跡 4 軒・土坑 18基・柱穴状ピット	土師器・須恵器・ 土製品・瓦・ファイゴ					
要 約	<p>畑ヶ坂遺跡は市域の南部、牛頸窯跡群の北辺部に位置し、牛頸山から流出する牛頸川と平野川が合流する左岸側に広がる広範な微高地上に立地し、同じ微高地に立地する日ノ浦遺跡群、塚原遺跡群の南西縁辺部にあたる。調査では竪穴建物 4 棟、土坑18基、ピット群を検出した。これら遺構は出土した土器からおおむね 7 世紀後半ごろ営まれたと推定される。調査区の北部では、厚い包含層が堆積し、焼土やファイゴ、鉄滓などが出土しており、須恵器窯のみでなく、鉄工房等の存在が窺える。</p> <p>畑ヶ坂遺跡の範囲での調査は過去 3 回行われたが、おおむね今回調査と同時期の遺構が確認されている。これらの調査地点を介して隣接する日ノ浦遺跡群と塚原遺跡群とは遺跡名は異なるものの立地や造営時期から、共に一連の遺跡と考えられ、大規模なムラの南西方向への広がりを確認できた。</p>								

大野城市文化財調査報告書 第170集

畑ヶ坂遺跡 1

平成31年 3月29日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510

福岡県大野城市曙町 2-2-1

出版 九州コンピュータ印刷

〒815-0035

福岡市南区向野 1丁目19番 1号